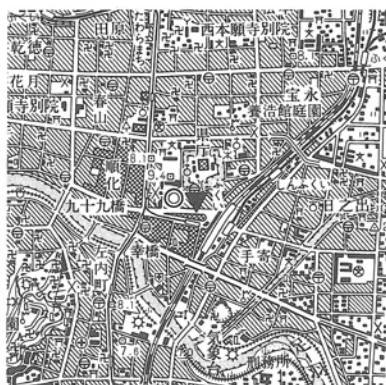


福井・福井城跡

- 1 所在地 福井市中央二丁目、大手二・三丁目
- 2 調査期間 二〇〇二年(平14)七月～二〇〇三年二月
- 3 発掘機関 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 4 調査担当者 本多達哉・河村健史・御嶽貞義
- 5 遺跡の種類 集落跡・都市跡・城郭跡(武家屋敷地)
- 6 遺跡の年代 縄文時代・古墳時代・奈良時代・室町時代・江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(福井)

調査地は、江戸時代福井城本丸の南側にあたる。今回の調査は、JR福井駅西口地下駐車場建設工事に伴い実施された。福井城下の絵図によれば、百間堀を挟む両岸は武家屋敷地で、一部は時期により火除地とされた。木簡は、吉野川西岸(中世)と百間堀西側・東側(近世)の三つの調査区から出土した。

百間堀の前身である吉野川の西岸からは、中世の石垣・通路状遺構・砂利敷道路・井戸・土坑などを検出した。

木簡は、一六世紀中頃～後半の柱穴一〇一・一三三から一点出土した。

百間堀西側は、江戸時代を通じ家老・高知クラスの上級武士の屋敷であった。

木簡は、一〇一・一〇〇五から一点、一〇一・一〇〇六Aから一点、四一四〇一から七点、九一〇四から一点、一〇一・一〇一〇から二点、二一二〇一から一点、一〇一・一〇三六から二点、計三九点が出土した。

廃棄土坑一〇一・一〇〇五からは木簡の他に、大橋Ⅱ期の初期伊万里や景德鎮系染付碗・皿類や大量の瀬戸美濃天目茶碗、白磁皿写しの志野中皿や南蛮長胴壺などの陶磁器の他、漆器碗や人形・下駄・箸などの木製品も大量に出土している。中国染付や初期伊万里等磁器の比率が非常に高いこと、接待用と思われる天目茶碗の出土量が多いなど、上級武士にふさわしい内容といえる。

廃棄土坑一〇一・一〇〇六Aは一〇〇五同様中国染付や初期伊万里等磁器の比率が非常に高い。

廃棄土坑四一四〇一も一〇一・一〇〇五・一〇〇六A同様中国染付や初期伊万里などの磁器の比率が非常に高いが、殆ど碗類で占められ、皿類が非常に少ないという偏った器種構成である。また、珍し

いものとして古染付向付が二個体以上出土している。

以上の一〇一〇〇五・一〇〇六A・四一四〇一の廃棄時期は、出土陶磁器の編年や屋敷居住者の交代時期からいずれも一六四〇年代前後と考えられる。

廃棄土坑九一〇四は、他の土坑と離れた位置にある。出土陶磁器は絵唐津や黒織部沓茶碗など、慶長期のいわゆる桃山陶磁中心である。

土坑一〇一〇一〇は、一〇一〇〇五に近接する。瀬戸・唐津の天目茶碗をはじめ瀬戸美濃製の御深井脚付多角鉢や陶胎染付筒碗など、非日常品も多く華やかである。時期は、大橋Ⅱ1期の大ぶりの筒碗を写した陶胎染付碗がみられるものの、伊万里焼が一点も出土していないことから一〇一〇〇五より遡る。

廃棄土坑二一〇一からは、さまざまな土器類、石製品、金属製品や魚骨が出土した。時期は近世初頭と考えられる。

廃棄土坑一〇一〇三六は、平面はいびつな方形を呈し、東西二・八〜四m南北三・六〜四・二mほど。検出面からの深さは〇・八〜一・二mほどを測る。焼塩壺などの土器類や石製品・金属製品・木製品が出土した。時期は一七世紀後半とみられる。

百間堀東側は、築城期から武家屋敷地とされたが、寛文の大火（一六六九年）以後は火除地（御菜園）と地目が変化する。

木簡は、三一三二九から一点、三一三三〇から一点、一〇一包含

層から一点、計三点が出土した。

土坑三一三二九からは、土器類などが出土した。遺構の時期は一七世紀代であろう。

土坑三一三三〇は、武家屋敷地にあたる。出土陶磁器は、伊万里焼碗や唐津焼餡釉碗など大橋Ⅲ期に相当するが、概して少ない。出土文字資料は一点のみだが判読できず、その性格は不明である。出土状況から大火後に被災物を片付けたものではなく、大火以前に廃棄されたものと考えられる。

8 木簡の积文・内容

柱穴一〇一三三

(1) ・

110×24×3 051

廃棄土坑一〇一〇〇五

(2) ・「喜」

・「喜

(81)×23×5 039

(3) ・「はしたて村

・

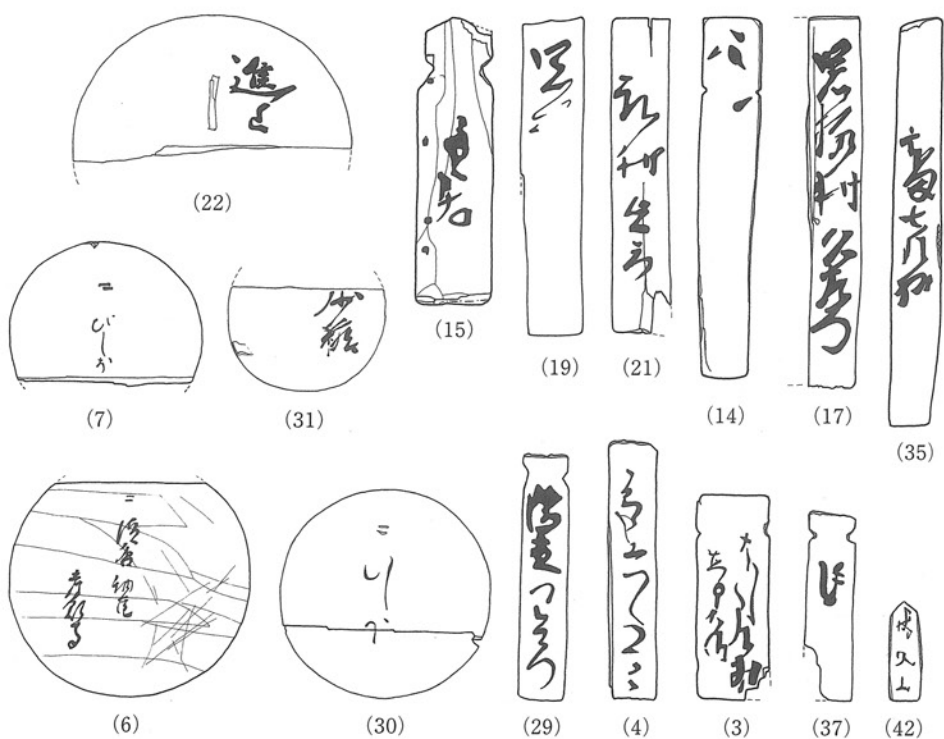
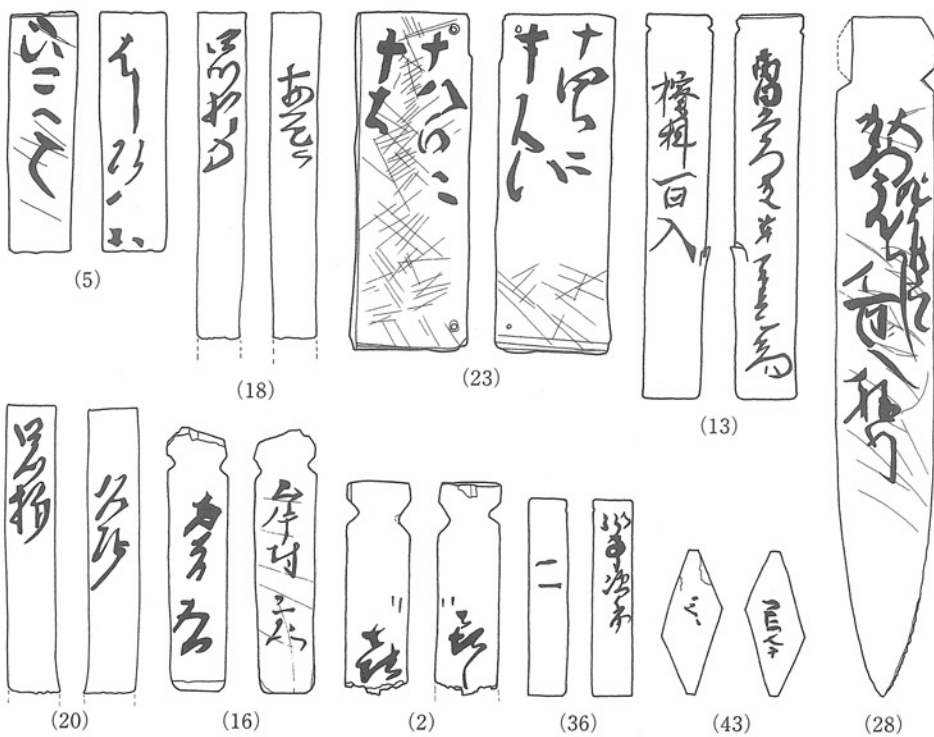
78×27×5 032

(4) 「有六郎

98×19×4 011

廃棄土坑一〇一〇〇六A

- | | | |
|------|---|----------------|
| (5) | ・「は」 ^{〔たてカ〕}
□□ [」] | |
| | ・「ひこ」 ^{〔もんカ〕}
□□ [」] | 91×25×2 011 |
| (6) | 「浜名納豆
孝願寺」 | 径127×厚6 061 |
| (7) | 「ひ」 ^{〔ほカ〕}
□□ [」] | 径103×厚8 061 |
| (8) | ・「飛車」
・「竜王」 | 32×29×11 061 |
| (9) | 「□□□□」 | (145)×26×2 019 |
| (10) | 「□□」 | (142)×26×4 019 |
| (11) | 上□九
「月」 | (74)×31×2 061 |
| (12) | 「進上」 | 226×(44)×6 061 |
| (13) | ・「 ^{〔酒カ〕} 田久右衛門殿」
「門尉」 | 146×25×4 032 |
| (14) | ・「 [」] 蜜柑百入」 | 137×22×5 032 |
| (15) | 「 [」] □□」 | 110×29×6 032 |
| (16) | ・「 [」] 岸村 □右衛門」 | 100×23×4 032 |
| (17) | ・「 [」] 岩□村久左衛門」 | 140×(21)×4 011 |
| (18) | ・「□□」 | (124)×18×4 019 |
| (19) | ・「□□」 | 119×25×5 011 |
| (20) | ・「□□」 | (108)×19×4 019 |
| (21) | 「□村□□」 | 120×22×3 011 |
| (22) | 「進上」 | 径147×厚5 061 |



- (23) 「十四日に
。十はい。」
・「。十八日に。
十は。」
- (24) [□ □]
- (25) []
[]
- (26) [□ □]
- (27) [車^{〔郎カ〕}
□倉□]
- 廃棄土坑四一四〇一
- (28) [〈 九月廿六日
[]百八拾匁]
- (29) [〈 []]
- (30) [ひ^{〔ほカ〕}
□]
- (31) [砂糖]
- 127×(43)×5 065
- 141×22×4 011
- 96×24×4 011
- 117×29×2 011
- 251×(18)×3 081
- 299×43×3 033
- 94×18×4 032
- 径110×厚5 061
- 径83×厚5 061

- (32) [志^{〔右衛門カ〕}
□□□(刻書)]
- (33) [〈 []]
- (34) [〈 []]
- 廃棄土坑九一〇四
- (35) [本多七左衛門]
- 土坑一〇一〇一〇
- (36) [□事次□]
- (37) [〈 []]
- 廃棄土坑二一二〇一
- (38) ・[□□ □
□ □ □
[]]
- 大寺□□]
- (126)×114×12
- 146×23×5 032
- 100×27×6 032
- (157)×19×3 011
- 75×15×2 011
- 71×18×5 032
- 142×58×16 065

廃棄土坑一〇一〇三六

(39) 「ちりぬるを

いろはにほへと」

147×46×7 011

(40)

「

いろはにめほ□へと

りぬる

わ□

よたれ

つね

らむ

251×(108)×5 061

土坑三一三二九

(41) 「進上」

62×46×7 011

土坑三一三三〇

(42)

「

38×12×3 065

一〇一包含層

(43)

「

・ □

55×19×3 065

(2) (3) (4) (5) (16) (17) は年貢の荷札と考えられる。(6) (7) (22) (30) (31) は曲物底板。

(6) の「孝顕寺」は藩主の菩提寺である。(7) (30) 「ひし□」(「ひしお」

であろう) (13) 「蜜柑百入」(12) (22) (40) 「進上」や、貴重品であった(31)

「砂糖」など贈答品と考えられる文字が多いのは、上級武士の面目

を示す特色といえる。(8) は将棋の駒。文字は漆で書かれる。(12) は箱

の蓋の材か。(32) は漆刷毛に刻書する。(35) に記載された「本多七左衛

門」は、現存最古の福井城下絵図である「北庄家中図」(慶長一八年

「一六二三」頃) では、居住者が「城代 本多七左衛門」と記され、

木簡の内容と一致する。(36) は荷札以外の用途も考えられる。(39) (40) は

いろは歌の習書。(39) は左行から書く。

なお釈読にあたっては、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館の佐藤

圭氏のご教示を得た。

9 関係文献

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『福井城跡』(福井県埋蔵文化財報告一〇二、二〇〇八年)

(本多達哉・河村健史)